

春秋

李夫之



第五集



春秋詩社

春秋／第五集 目次

表紙 題字・佐藤春夫 陶彫・河井寛次郎
口絵アート 棟方志功「弘仁の柵」 河井寛次郎 拓本

〈詩〉 朴の花 浅野 晃 4

陸游詩集(三) 伊藤 桂一 6

螢 世耕 政隆 7

母恋ヒ 神門 四郎 8

曠野に佇つ 柳井 道弘 10

萩原朔太郎生誕百年記念特集

漂泊者の歌 萩原朔太郎 12 ある夜の萩原さん 中谷 孝雄 13

萩原さんの思ひ出 浅野 晃 14 朔太郎先生 田中 克己 16

まだ山科は過ぎずや 杉山 平一 18 天才と自覚 吉本 青司 20

その人 世耕 政隆 21 父の百年祭のこと 萩原 葉子 23

萩原先生と私 柳井 道弘 24

〈短歌〉 仏桑華の咲く島 井伊 文子 28

〈染絵〉 うなる 由水 十久 41

追悼 菅原杜子雄

挽歌 柳井 道弘 46 弔辞 立花 和雄 47

莫大な遺恨 深甚なる悲しみ 于 強 48

〈写真〉 美の巡礼 柿沼 和夫 52

〈論説〉 六条御息所といふ女 友繁 三三二 59

源氏物語と萬葉集(四) 栢木 喜一 68

〈経絵〉 スールヤー愛の百六十心 村井 裕子 72

〈随想〉 檻樓先生年譜私註(二) 幡掛 正浩 76

たかり 勝部 真長 82

〈絵画〉 文楽「曾根崎心中」の舞台スケッチ 柳井 愛子 88

〈論説〉 「阿留辺幾夜宇和」について(二) フレデリック・シラール 90

〈小説〉 二つの勲章 望月 敦子 99

風信抄

109

後記

110

カット 棟方志功

萩原朔太郎生誕百年記念特集



萩原朔太郎(大正13年)

ああ汝 漂泊者！
過去より来りて未来を過ぎ
久遠の郷愁を追ひ行くもの。
いかなれば踰爾として
時計の如くに憂ひ歩むぞ。
石もて蛇を殺すごとく
一つの輪廻を断絶して
意志なき寂寥を踏み切れかし。

〔「漂泊者の歌」より〕

ある夜の萩原さん

中谷 孝雄

昭和十四年のことであつたか、十五年のことであつたか、それも春のことであつたか秋のことであつたか、私は日記をつけないので確かめて見ることもできないが、とにかくその頃のある夜、銀座のあるレストランの広間で、四十名そこそこの文士の集りがあつた。誰を中心にした会であつたかも定かでないが、その会の席上、萩原さんは手品を披露して見せて下さつた。

正面の壇上に立たれた萩原さんは、ポケットから銀の懐中時計をとり出し、それをみんなによく示してから、しばらく何やら呪文のやうなことを呟きながら両手で弄んでゐられたが、やがてその時計を元のポケットへもどされたかと思ふと、一瞬を置かず、くるりと後ろ向きになられた。なんと、ポケットへもどされた筈の時計は、萩原さんの背中のど真ん中に張り着いてゐるではないか。
みんなは拍手して喝采した。しかしみんな

の笑ひ顔から察すると、もう誰にも凡そ手品の種の見当はついてゐるやうであつた。私も私なりにほぼ見当はついてゐたが、萩原さんが折角その会に興を添へて下さつた手品の種明かしを、今頃になつて私の勝手な想像で試みるつもりはない。

手品が済んで五、六分も経つた頃、萩原さんが私のゐる席の方へやつて来られた。私はそれまで隣席の武田麟太郎と話し合つてゐたが、直ぐ立つて萩原さんに挨拶をした。萩原さんも機嫌よくそれにこたへられたが、つと武田の方をふり向いて、いきなり、「お前の小説、先輩からいろいろかじり取つて……まるでイタチみたいな奴だな」といはれた。

武田としては恐らく挨拶の順番を待つてゐたのであるが、いきなり大先輩から罵られたので、一瞬ぼかんとしてゐたが、しかし直ぐ立ち上つたかと思ふと、肩を怒らし

「イタチとはなんだ。先輩なんてものは、後輩からかじられる為にあるやうなものじゃないか。かじられたら名誉だと思つて喜ばばよいのだ」と云ひ返した。

萩原さんは、この後輩の暴言に昂奮して身をふるはせてゐられたが、やがて吐きすてるやうに

「このイタチめ！」といつて、ぷいと向ふへ行つてしまはれた。

武田は目に憎しみをこめてその後ろ姿を見送つてゐたが、直ぐ私の方をふり向いて、「ぼく、もう帰ります」と云ひ残して会場を出て行つてしまつた。

後で私は、萩原さんがなぜあんな風に武田を罵倒されたのかを考へて見たが、よくは分らなかつた。或ひは武田が彼の小説に萩原さんの詩の一節をでも引用したことが原因になつてゐるのかも知れないと思つたが、その頃の私は武田の小説を殆ど読んでゐなかつたので、なんとも決定的なことは云へなかつた。もしさうだつたとしたら、よほど引用の仕方が拙かつたか悪かつたのだらう。

会が済んでから、私は保田與重郎君に誘

はれ、萩原さんのお伴をすることになった。一行は五人であったが、他の二人が誰々であつたかは、今はもう記憶に定かでない。

十分ほど街を歩いてから、数寄屋橋近くのバー（酒場）へ入った。かなり混んでゐたが、奥の方にテーブルが二つ空いてゐた。その一つは、たつたいま客が去つたばかりで、ボーイさんがせつせとその後片付けをしてゐた。

前から空いてゐたテーブルをかこんで、萩原さんと保田君と他の二人とが坐つた。

実は私が萩原さんの向ひに坐るやうにと勧められたのであつたが、私はんで酒が飲めないで遠慮して、ちやうど後片付けが

済んだばかりの隣りのテーブルに一人で坐つた。

酒が始まり、萩原さんのテーブルでは会話が弾みだした。会話といふより、保田君らの質問に対して萩原さんが答へてゐられるのであつたが、周囲が騒がしいので、私には殆ど聞き取れなかつた。

私は強いて聞耳を立てるでもなく、コーヒを啜りながら、ぼんやり萩原さんの話しぶりをながめてゐた。するといきなり、萩原さんの大きな声私の方へ飛んできた。

「中谷君、ぼくは小説家が嫌ひでね」

私は驚いて、反射的に訊ねた。

「どうしてですか」

「小説家はいつも人の仕草や酔っぱらひぶりをじろじろ観察してゐるだらう。気持ちが悪いよ」

「失礼しました。観察してゐた訳ではありませんが……」

萩原さんは少し言葉をやはらげて、

「ぼくも一般的なことを云つたまでだよ」と、必ずしも私を咎めたのではないといふやうな口ぶりだつた。

これはただその場限りのことに終り、その後、私が萩原さんから疎外されるやうなこともなかつた。

萩原さんの思ひ出

浅野 晃

萩原さんにはじめてお目にかかつたのは、「新日本」の編集会議のときであつたと思ふ。

「新日本」は新日本文化の会の雑誌とし

て、昭和十三年の正月に創刊号が出た。そのとき私も編集委員の末席につらなつたおかげで、萩原さんにお目にかかる機会を得たのである。

を別から、十年ぶりで好きな文学の世界に帰つてきたところであつた。それだけに、この「新日本」の編集会議のことは、いまだに新鮮な印象として記憶にある。

編集会議は、ほとんど毎週あつたやうに記憶する。私にはじつに楽しい集りであつた。佐藤春夫先生が中心で、萩原さんと倉田百三さんが両翼であつた。あとは先輩格の中河與一氏のほかは、中谷孝雄、林房雄、藤田徳太郎、芳賀檀、保田與重郎といった、血気さかんな若い人たちであつた。しかも上にいつたやうに、中谷と林のほかは、みんな始めて会つた人たちであつた。私はこれが機縁で、佐藤先生に師事するやうにもなり、萩原さんと相知るやうにもなつたのであつた。

私たちの編集会議は、午後を集つて、夕食をすまして散会したやうに覚えてゐるが、そのあと若い連中で、銀座へ出て、夜おそくまで勝手な気焰をあげてゐた。萩原さんも倉田さんも、たいさう元気で、いつも盃を重ねて熱弁をふるはれた。私は倉田さんは肺病で病床の人かと思ひこんでゐたのに、この有様だつたので、これが本物の倉田百三かといぶかつたほどだつた。萩原さ

んの第一印象も、意気軒昂として、英姿颯爽といつたものであつた。ただどこもなく、悲歌慷慨の趣きがあつた。私は正直なところ、萩原さんの詩や散文にはあまり親しんでなかつた。だから、まつたくの初対面といつてよかつた。それだけに鮮明な印象をうけた。それは幕末の勤皇の志士たちの面影に通ふやうなところがあつたことだ。私は梅田雲浜や頼三樹三郎などの名前を想ひ起してゐた。

「新日本」時代の思ひ出が一つある。そのころ私は楠公論をぼつぼつ書きはじめた。のちにぐろりあ叢書に収められた『楠木正成』にまとめたものである。「新日本」に『一つの英雄論』といふ題目で書いたときのことである。それは湊川の決戦に臨まうとしてゐる正成の姿には、どうしやうもない深い疲労の色がうかがはれるといふ意味のことを書いたものであつた。

私の文章が雑誌に出たあとの編集会議で、萩原さんがわざわざ私の席にやつて来て、

「浅野君、こんどの正成論はよかつたね。ぼくもまつたく同感だよ」といはれた。私は、へああ萩原さんも、太平記を読んでゐるんだな、いま、読んでゐるところだな」と

思つた。うれしかつた。

いまそのことを思ひ出して、あれこれ妄想を逞しくしてゐる次第だが、もし萩原さんが幕末の世に生を享けてゐたら、あるひは雲浜や三樹三郎のやうに、井伊の大獄の犠牲者になつてゐはしなかつたらうか。萩原さんだけではない。丸山薫、伊東静雄、中原中也の諸君なども、やはり勤皇の志士として、松陰や左内と運命を同じくしてゐたことはなかつたらうか。

萩原さんの計をきいたのは、私が陸軍宣傳班員としてジャワにゐたときのことであつた。だから萩原さんとは、前後五年足らずのお附合ひでしかなかつた。私は氏の没後、氏の詩集や、評論や、アフォーリズムなどの主なものを読んだ。そして、多くのものを学んだ。

例へば『恋愛名歌集』である。私は立正大学で二十年あまり文学を講じてゐたが、王朝和歌論の講義を何回かやつたとき、いつもこの本をテキストに使つて、じつに楽しく講義を運ぶことが出来た。どここいつて出色といふわけでもなく、きちんとしまつたところもなく、すこぶるたよりなささうでゐて、じつによく書けてゐる。これに

対して『郷愁の詩人・蕪村』の方は、萩原さんらしくもない優等生の作文になりすぎてゐるのがなんとも惜しまれる。私は氏の詩集を講じたこともあるが、この方は『郷土望景詩』に尽きるといつてよい。

最後に最近の経歴を附記して結びとした。いちめの問題が発生して東京の中野区立の中学校の二年生が、郷里の盛岡までいって、駅のデパートのトイレの天井にベルトをかけて、縊死した。その記事を読んだ

朔太郎先生

朔太郎先生とは短いおつきあひであつたが今だに印象的に忘れられないことが多い。初めてお目にかかつたのは昭和十二年、大阪へお帰りの時で、先生の父上密蔵ドクターは河内の木の本村（いま八尾市）の由で、前橋は開業の地である。入沢達吉先生が父上に会はれて、「あなたは群馬県一の名医だが、令息朔太郎さんは日本一の詩人ですよ」

とき、私はとつさに萩原さんの「天上縊死」を思ひ出した――

遠夜に光る松の葉に、
懺悔の涙したたりて、

遠夜の空にしも白き、

天上の松に首をかけ、

天上の松を恋ふるより、

祈れるさまに吊されぬ。

誰もが知つてゐる『月に吠える』のなかの一篇である。私はとたんにこの詩を思ひ出

田中 克己

といはれたことはその随筆にお書きである。わたしは朔太郎をよまず、春夫、犀星、順三郎から出発し、そのことを三好達治氏にいふと、「朔太郎をよまないで詩が書ける人間とは」とびつくりされた。昭和十二年追分の油屋へゆく途中群馬県を通つた時のことである。三好さんと限らず堀さんも朔太郎に心酔したことは亡くなられたあと『四

し、その詩が分つたのである。
なぜかと考へてみるに、私には天上の松の「天上」が、ひつかかつてこの詩がびつたり来なかつたのが、いまこの事件で、それが「天井」とよめたので、つかへが下りたのであつた。萩原さんの詩は、不思議な音韻の詩である。萩原さんの持説どほり、詩はやはり音韻である。

季』の朔太郎追悼号に年譜を書いてゐられることとわかる。昭和十三年上京、有楽町のパノンスといふ喫茶店で「明大で詩の講義をしてゐるが、その準備に意見をききたい」とのことと、昭和十四年の九月第三日曜より毎日曜に会を開かれ、『四季』の同人や読者が聴講に集まつた。先生は講義のあとわたしと喫茶店をのぞかれ、白秋先生がおいでなのを認めると、こはがつて、他に席を求められた。厭人癖はお生れつきで昭和十二年の初対面の時、小高根二郎君から私を紹介されると、いい顔をなさらず物もいはれなかつた。この講義は、あとは新宿で

開かれたが「パノンの会」と先生自身命名された。初会のパノンスにちなんでであるが、「スなんかいらぬいやね」といふのが朔太郎式でわたしは面白がつた。この会は大分つづいたがいつも二次会には紀伊国屋裏の酒場にゆかれるが、わたしが同行すると、「君、あそこを歩いてゐる女の子のうちどれが美人かね」と問はれ、「わたしは見ませんでした」といふと、「よくそれで詩が書けるね」と叱られた。お伴する酒場の仲居をお好きで、わたしが「あの女のどこが好きのですか」と問ふと「きこえる」とあわてられた。これが詩人の真面目であることをわたしは始めて承知した。毎日こはいお母さんから小遣ひ十円をもらつて出られるとのことと、わたしにも「時にはきみも食へよ」とお叱りになり、わたしは飲みも食ひもしないのにと不満であつた。第一、先生は当時の新宿の通りを市電（当時）、バ

ス、タクシーがこはくて中々わたれず、わたしの手を引いてお渡しした。帰りは遅くなり、よく交番で咎められたが、「明大講師といふ名刺を出すと、通してくれたよ」といはれた。交番で必ずのぞいて目立つたのである。わたしは先生の作では「フランスへ行きたしと思へどもフランスはあまりに遠し」といふのと、「われは飢ゑたりとこしへに、過失を父も許せかし、過失を人も許せかし」といふ句だけ、今でもおぼえてゐる。この詩の父は密蔵ドクターか、少年のころゆかれたキリスト教会での父なる神か、わたしには疑問である。但し服部三樹子さんが林富士馬氏のお宅で、神がかりとなり、萩原先生は地獄に落ちておいでといふのを、浅野晃氏、林氏を含めて一座色を失つたことを覚えてゐる。最後の審判にはせひゆるされて天国へ行かれんことを祈るものである。

先生の生誕から今年には百年目、亡くなられた昭和十七年からも四十四年たつた。生れながらの詩人、従つて不幸だつた先生のご冥福を祈ること切である。わたしも父方は河内の由で、先生とは同郷である。つれなかつた前橋の人は相容れなかつたのは当然であらう。ただに詩人としての感傷でなく、前橋を第二の故郷とし、河内の木の本では碑も立たず、朔太郎を読む人もないのではなからうか。まことに不幸な人であつた。謹んで哀悼の意を表す。先生にいただいた手紙やハガキは某君が保存するといつて、田舎へもち去り、そこで戦災に会つた様子である。全集にのつてゐるのをせめてもの心やりとする。受け取つたのはスマトラのメダン市で、わたしは毎日支局で先生の御逝去をすでに知つてゐたので、複雑な気持で受け取つた。昭和十七年の六月の某日、四十数年前のことである。

まだ山科は過ぎずや

萩原朔太郎

杉山 平一

私が詩をかき出したころは、萩原朔太郎はアフォリズムしか書かず、最後の散文詩集「宿命」を出した時分で、私はそれら散文詩に親しみをもった。あとから読む「月に吠える」や「青猫」などは、時代が移つてゐて、発表当時の衝撃はなく、むしろ、判りにくさへあつた。

新しく読む散文詩のなかで、「蟲」といふのが妙に記憶にのこつた。鉄筋コンクリートといふ言葉を耳にしてから、それが、虫のやうに頭に住みついたといふ作品である。その言葉をくりかへすうち、「テツ・キン・コン・クリート」のk音と撥音と促音が、私の中にも鳴りひびくのに気がついた。

そんなところから、朔太郎がしきりに説く詩の音楽性、ひびきの魔力といふものに気がつきはじめた。

私は、比較的イメージがはっきりしてゐる判り易いといふことで、室生犀星にも似たところのある初期の「純情小曲集」を

読んだが、とくにその巻頭にある「夜汽車」

(初出の題名「みちゆき」に親しんだ。そして、そのなかの「まだ山科は過ぎずや」といふ一行に妙に惹かれた。やましなといふ語感が、とてもいい、大津であつてはいけない、膳所であつてもいけない、山科でなければならぬ、と思つた。やましなのs音の快さから、この駅名が使はれたに違ひない。

朔太郎は、初期の短歌制作時代、「美棹」といふペンネームを多用したらしいが、朔のs音同様、このs音が好きだつたやうな気がする。

私は、かつて、シムソンの「聖フオリアン寺院の首吊男」といふ題名が気に入つてゐたが、それは、この聖の字が、首吊男と衝突、噛み合ふ面白さからだつた。ところが、小栗虫太郎が「聖アレキセイ寺院の惨劇」といふのを発表したとき、その魅力が、聖と惨劇の組合はせ以上に、sが三つ重な

ることにあるのに気づかされたことがある。

また芭蕉の「閑けさや 岩にしみ入る 蟬の声」を、米国の詩人が訳して、蟬の声を「シーケーダ サウンド」としてゐるのを見たとき、このs音の重ねが、原句の「しづけさ」「しみ入る」「せみ」と、s音を三つ重ねて、シャーシャーシャーと鳴く蟬の声の感じをひびかせてゐることに、気づいてゐたのか、と、かへつて教へられたことがある。

朔太郎はたしかにs音が好きで、「沿海地方」「荒寥地方」といふ詩の注で、「私が書かうとしたものは音楽だつた」と述べ、「無いし」「居るし」「暗くなるし」「できはしない」などの味を好んでゐるといつてゐる。

「月に吠える」のなかの「天景」といふ、やはらかなひびきに走る四輪馬車を歌ふ七行の詩のなかに

しづかにきしれ四輪馬車

といふs音を四つ重ねる言葉を、三行もはさんである。

人口に膾炙してゐる、やはり初期の「旅上」における

そこはかとなきはまきたはこの烟さへ

夜汽車にてあれたる舌には佗しきを

いかばかり人妻は身にひきつめて嘆くらむ

まだ山科は過ぎずや

空気まくらの口金をゆるめて

そつと息をぬいてみる女ごころ

ふと二人かなしさに身をすりよせ

しのめちかき汽車の窓より外をながむれば

ところもしらぬ山里に

さも白く咲きてゐたるをだまきの花

「みちゆき」の題名を「夜汽車」といふ散文的な題に変更したのも、汽車のs音とa音を飾りたかつたのかもしれない。

しかしおそらく、これらは、意識して計算されたものではあるまい。

七五調のしらべを脱け出して新しい世界を作り出した天才的な資質が、おのづから書かせたものであらう。

ふらんすに行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背広をきて

の、このはじめ三行の魅力が、ふらんすの「す」のほか、行きたし、せめて、遠し、新しき、背広、とs音のつづく魅力が、人々をひきつけたのはいふまでもあるまい。朔太郎の音韻に詳しい那珂太郎氏は、この詩の八行目の

五月の朝のしのめ

の五月も「さつき」と読むべきだらうといつてゐる。

この「しのめ」が、やはり「夜汽車」の終りに「しのめちかき」と出てくる。そして「ところもしらぬ山里」に「さも白く咲きてゐたる」とつづく。さうして、もう一度、はじめから読み返して行くと、「うすらあかり」「硝子戸」「ほの白みゆく」「しめやかなれども」「さめやらねば」「こちたしや」「にすのほいも」「そこはかとなき」と、一行一行にs音を入れて、山科へと盛り上げてゆく。

ところが、何度も口ずさむうちに「まだ

山科は過ぎずや」の魅力は、s音だけでなく、「まだ山科」にa音が五つも重なつてゐるからではないか、と思ふに至つた。

先年、英国のエリザベス女王が来日されたとき、スピーチの冒頭に、「私は」といふ代りに、つねに「ハズバンド・アンド・アイ」と切り出す言葉の、a音が四つ重なるひびきの何ともすばらしいと感心したが、朔太郎の「夜汽車」は、s音をひびかせるために、その背景にa音が、ものすごく重層してゐるのに気がついた。かぞへると、この十七行の詩に、何と八十九箇所もあるのである。左の・印のs音は二十六箇所ある。

夜汽車

有明のうすらあかりは

硝子戸に指のあとつめた

ほの白みゆく山の端は

みづがねのごとくにしめやかなれども

まだ旅びとのねむりさめやらねば

つかれたる電燈のためいきばかりこちた

しや

あまたるきにすのほいも

天才と自覚

——萩原朔太郎のこころ——

萩原朔太郎の詩は、いま読み返して面白いといふ詩ではない。そのシチュエーションは永遠であり、その「時」は、おそろしく孤独の瞬間である。まさしく永遠の時処位に成つたのが朔太郎の詩である。いはゆる靈智の産物である。同じ時処位（位は人格）に立つものだけが今日いま読んで興味をおぼえるのである。

朔太郎詩のシチュエーションは歴史の時処位である。たとへば古事記における稗田阿礼と太安萬侶、萬葉期の柿本人麻呂・大伴家持。萩原朔太郎はそれらの人々に同類のサウジエクトの詩人である。室生犀星は、朔太郎の詩集「月に吠える」の跋文に次のやうに書いてゐる。

君は楽器で表現できないリズムに注意深い耳をもつてゐた。君自らが音楽家であつたといふ事実をよそにしても、いかにほへを鍵盤にした最も進んだ詩人のやうに書いてゐる。

は明治が大正に改元される。

生を憧憬する心と、生をいとふ心との二つの矛盾が何時まで私の心で戦をづけて居るのであらう。私は明るい方へ明るい方へと手をのばして悶えながら却つて益々暗い谷底へ落ちて行くのである。

この後に「社会から告別して淋しい旅に出で立つ……」と生の苦痛をうつつたへてゐる。このやうな煩悶と痛苦が詩人の革命となり「月に吠える」を生む。生を憧憬する心と生をいとふ心のハムレット的ニ律背反

その人

神田の書店で、棚の本をひき出し頁をめくるうちに、なかの横顔の写真の人に、私はどこかで会つてゐるやうな気が、ふとしたのであつた。しばらくして、「ああ、あのんだ。ましがひない」と自分に云ひきかせ

一人であつた。

犀星と朔太郎は、北原白秋から「君達は、同じ泉の底から更に新しく湧き出してくる水の清しきを感じさせる」と言はれた同じサウジエクトの詩人である。

朔太郎の「純情小曲集」は、自序の中で「やさしい純情にみちた過去の日を記念するための詩集で、その中の『愛憐詩篇』は始めて詩といふものをかいたころのなつかしい思ひ出である」とのべてゐる。詩風はふしぎに典雅であつて何となくあやめ香水の匂ひがするともかいてゐる。「典雅であやめ香水の匂ひ」ここにも萩原朔太郎の天才的発想のサウジエクトが感じられる。

私が取り立てて言ひたいのは、十五歳の頃古今和歌集を読み紀貫之の歌論にふれ短歌から出発した詩人朔太郎が、少年期から壯年を経て晩年に至るまで、同じ詩のころを持ちつづけたことである。そのやうな

吉本 青司

詩人のサウジエクトは、天才による未覚期から四十歳前後の「詩の原理」を書いた自覚期以後の詩業の数々が証明してくる。詩集「青猫」「蝶を夢む」の時代から制作に打ちこんだ一連の郷土望景詩篇は、四十歳で刊行した「純情小曲集」に初出し、五十三歳の最後の詩集「宿命」（初刊本）の中にも出てくるのである。この「郷土望景詩」といふ主題は、朔太郎詩のサウジエクトを象徴する用語である。

高村光太郎に「詩の革命」といはせた第一詩集「月に吠える」は、萩原朔太郎の天才に因る詩業である。純情小曲集の中の「愛憐詩篇」は作者自らもいふやうに健康な少年のセンチメントが美しい。同じ自覚前の作ではあつても「月に吠える」の方は、青年のセンチメントの悶えがかなしい。明治四十五年（一九一二年）五月、二十六歳の朔太郎が妹、津久井ユキに宛てた書簡の一部を引かう。それはシチュエーション、——特に当時の人文的情況ぬきに読むことはできない。二年前（一九一〇年）幸徳秋水らの大逆事件が発生、翌年処刑。佐藤春夫の「愚者の死」が生まれた。筆簡の二月前には石川啄木が死んでゐる。筆簡二月後に

が、決断されて暗い谷底へ落下し月に向かつて吠えるのである。詩集巻頭の「地面の底の病気の顔」はこのころの深淵に落下して「竹」に転生した詩人自身の顔である。

やがて朔太郎のサウジエクトの自覚期が「青猫」と共にやつてくる。「私の情緒は、激情といふ範疇に属しない。むしろそれはしづかな靈魂ののすたるぢやであり、かの春の夜に聴く横笛のひびきである」といふ序詞の一行がすべてを語つてゐる。朔太郎のセンチメントは「郷土望景」のころであり、古今和歌集の貫之のころである。昭和十二年（一九三七年）十二月、朔太

郎は次のやうな未発表の望景詩を朗読した。

わが草木とならん日に
たれかは知らむ敗亡の
歴史を墓に刻むべき。
われは飢ゑたりとこしへに
過失を人も許せかし
過失を父も許せかし。

——父の墓に詣でて——

日本敗亡戦争開始の翌年、詩人は病床で時計の針を凝視したまま永遠の眠りについてた。

人は駿河台のはうに坂を下りてゆかれた。そのころ、わたしは旧制中学を卒業する。かしの木はかくらひではなかつたか。どうも記憶はたしかではないが。とすれば、昭和十五年であらうか。季節もはつきりしない。とにかく、当時、駿河台下の市電通り（現在は路線がない）の書店には、どこにも「日本への回帰」が並んでゐた。

東京堂によく立寄ることがあつたが、その書棚には、あかるい燭光の下に、「日本

世耕 政隆

てゐた。

写真は、萩原朔太郎氏であつた。同一とおもはれる人は、先刻、省線いまは国電お茶の水駅をでて、人通りを、偶然、いっしよに歩いてゐる人に違ひなかつた。その

の橋」(保田與重郎著)が華々しく幾冊も飾られてゐたのを、記憶してゐる。萩原さんのそれを推賞するパンフレットもあつた。

それとほぼ同列の部所に、「昭和詩鈔」(萩原朔太郎編集)、詩集「宿命」も並んでゐた。

いきなり「宿命」をひらくと、冒頭に、「ああ固い氷を破つて突進する、一つの寂しい帆船よ。……空にひるがへる、浪々の固体した印象から、その隔離した地方の物侘しい冬の光線から……」にはじまる「氷島」の数節が眼に入つた。

つづいて、「無明は浪のやうなものだ。生活の物寂しい海の面で、寄せてはくだけ……」。また、「寂寥の川辺」には、「古駅の、柳のある川の岸で、かれは何を釣らうとするのか。……生活の薄暮がくるまで、……長い間、針のない釣竿で……」。わたしは、短いなかに凝縮された何物かが、ここにはあると思つた。そして、「……否……」が答へた。魚の美しく走るを眺めよ、水の静かに行くを眺めよ。いかに君は……この風景の聡明な情趣を。……終日釣り得ないこ

とを希望……されば日当り好い寂寥の岸辺に坐して、私のどんな環境をも乱すなかれ。」これらのどの散文詩にも、わたしをして、こころよく溶けこませる魔性の持つなにかがあつた。

上京して間もなくであつた。その時は。それまで、わたしは海べの小さな町に住んだりしてゐた。そこは、夏だけ避暑や海水浴客で賑はふが、その他は、すべてが死んだやうになり、波音だけがきこえる魚くさい古い町であつた。町の背後をながれる川は有数の釣場である。海面には大きく突堤がつき出てゐた。砂に半ば埋つた廃堤だ。そこに波が寄せては泡立ち、白くしぶいてゐた。波の荒ぶ日は、大きな響きとともに、純白の飛沫を、終日、くり返し高く上げてゐた。ながく外国に行つたきりの父が、突然、東京に帰国したりした。わたしは顔も知らず、その侵入者を恐れた。家の内情も雑然とし、多忙となり、急変した。東京に呼ばれた。祖母や周辺の人々、友達とも別れた。これからの進路もきまらず、あても

なく希望もそこはかとなく、暗く不安な日々で、わたしは孤りであつた。海べの町にただ戻りたかつた。

「宿命」といふ語、その響きは、自分をそのとき、どうしてつよく捉へたのであらう。その詩が、暗喩と、ふしぎな韻脈をもち、折りがさなりたたみかけ、波のくりかへし、音の反復律動となつて、そのゆるやかな渦に自分は慰められ、同所的安堵(あんど)に厚く包まれてゐた。

立読みした本の、萩原さんの写真から、ふと気づいた写真とおそらく同一とおもはれた人は、浅黒く、臉がいくぶん盛りあがつて、眼の大きく、涼しげで、瘠せた人であつた。とことこ懸命に歩くふうであつた。ある種の風格を感じ、周囲の群衆からすこし際だつてゐるやうであつた。ずいぶん高齢に見えた。(その時は)。はるかに離れた存在、といふ気もした。

その後も、その人の姿を、一度くらい駅頭に見かけたが、その中折帽を、人混みのあはただしさの中に、すぐ見うしなつた。

父の百年祭のこと

友人の小松郁子さんが、電話で怒つてゐた。

彼女はとても怒りやすい詩人で、いつも何かに腹立ててゐる。正義の味方なのである。

今日怒つた理由は、現代詩人のフェスティバルに出席したところ、今年に朔太郎生誕百年に当たる年なのに、朔太郎のサの字も出なかつたと言ふことだつた。北原白秋のやうにマスコミが宣伝しないので、気がつかなかつたのだらうと私は思つたが、あまりマスコミに乗るより地味の方が父にふさはしいと思つた。柳井さんが特集号で、朔太郎を編むについて、私に何か書くよう言はれ、さて何を書いたらよいか、書くことがあるやうで無いのである。

毎年五月の命日に「朔太郎忌」と言ふ行事があり、前橋市立図書館主催の催事があるが、今年はそのをひとときは大きくしたのである。

毎年講演を詩人に頼み、他には詩の朗読があるが、マンネリ化もあるのであるべく新しいものを考へたいと、私は思つた。

今年に百年祭なので、いつもと同じ講演ばかりでは変り映えないので、私の提案を受け入れてもらひ、マンドリン演奏をメインに色どりをつけることに成功した。父は音楽が好きでマンドリンにのめり込んだのである。

熱心に弾いたり、演奏会で合奏したり、また編曲した時の楽譜が残つてゐる。ついここで書かせてもらふと、父の行事だから私がすべて采配をふるつてゐると考へてゐる人があつて(大方さうらしいが)来年はぜひ講演させてほしいと申し込んだり、何故一度も呼んでくれないのかと、怒つたり、ひどい人は私の好きな人ばかりに頼んでゐると陰口をきくのである。その上、百年祭に便乗して、いろいろの人が作品展示の申し込みをして来るのである。

無関係の人が割り込み押しかけと言ふ売り込みが来て困つてゐる。特に困つた書家のA氏など、電話や手紙が度々来て、何故断られるのか、自分としては朔太郎氏が好きで良かれと思つて作品を作つてゐるのに、理解が無さすぎる。それならばこつちだけで勝手にするから、案内状を貴女の知人達に出して知らせてくれと言ふ。ちよつと理解に苦しむのである。

すべて市立図書館の野口武久さんと伊藤信吉、那珂太郎の両氏の決断によるもので、私は事後に知らされるのである。横道へそれてしまつたが、そんなわけでマンドリンを提案したのだつたが、百年祭は毎年より少し変るのではないかと思つてゐる。

マンドリンを弾いてもらふのは、神戸在住のマンドリニスト桑原康雄氏に決まつた。桑原さんは世界的にマンドリニストとして活躍中の人で、父がマンドリンを習つた比留間賢八氏の娘絹子先生の直弟子である。私も女学生の時絹子先生にマンドリンを習つた縁で、今度お願ひすることになつたのである。

それに東京池袋西武百貨店で展示会のあつた期間中「スタジオ二〇〇」で同じ、桑原

氏のマンドリン演奏や合奏のことを考へたのである。

これならば私の発言も通ることなので、めでたしであつた。ついでにもう一つ私の微力を受け入れてもらへたことは、父と友達だつた唯一の人、宇野千代先生にも感想

萩原先生と私

昭和十五年の早春、旧制高校受験のため上京したぼくは、東大正門前のM先輩の下宿に寄食してゐた。

M先輩は、岡山一中の先輩で、ぼくが一中在学中にしばらく同居してゐた六高生の従兄の友人であつた。二人は共に六高柔道部で、Mさんは主将でドンと呼ばれ、小柄な従兄は小僧と呼ばれ、大変仲が良かった。やがてMさんは東大に進み、従兄は家業を継ぐために岡山医大に進んだが、医大の寮の二階の自室の窓から階下の食堂に飛び降りた際に胸を打ち、それがもとで肺病を

たちまち糧道を断つにきまつてゐた。

高校受験の二日目、試験場から校庭の並木を眺めてゐるうちに、何かいさぎよいものが静かに湧き上つてきて、ぼくはさつと席を立つと答案用紙を提出して試験場を出た。

下宿に帰つて、ドンさんにそのことを話すと、ドンさんは口をへの字に結んだまま、一言も口をきかなかつた。

やがて、夕方になり、ドンさんはぼくを誘ひ出して東大構内の三四郎の池のほとりに行つた。その時、二人が何を話したか覚えてゐない。大学の食堂で夕食をとる頃には、ドンさんは平常の闊達なドンさんに戻つてゐた。

その翌日、ドンさんは不器用にネクタイを締め、はじめての背広を着て任地に発つた。ぼくは東京駅まで見送つた。

前置が長くなつたが、かうしてぼくは始めて詩人にお目にかつたのだつた。

その頃ぼくは、朔太郎先生の講義が終ると、いつものやうに先生と連れ立つて神田の街を歩き、昼食を御馳走になつて別れた。先生はいつも、駿河台下の交差点から新宿行の電車の停留所に向つて、危なつかし

をお願ひできたことだつた。これは、百年祭を記念する上にも最高の名譽のこととなるので、私ごとき虫ケラの陰の力を買つてもらへるのでは、ないかと思つてゐる。と言ふのも、宇野千代さんの方から挨拶していどならば、前橋へ行つてもよいと言つ

柳井 道弘

患ひ、在学中に亡くなつた。

その葬式には、ドンさんを始め、旧六高柔道部の猛者連が集まり、式後のお齋では、放歌高吟、はてにドンさんは盃をガリガリと口中で噛み砕き、血を滴らせながら従兄の遺影の前に坐りこんで、「小僧！小僧！」と絶叫しながら号泣した。

ドンさんは東大でも柔道部に籍を置いて主将をつとめ、卒業と同時に任地の北京に赴くことになつてゐたので、自分の下宿をぼくに明け渡して下さることになつてゐただつた。

て下さつたので、こんなありがたいことはなかつた。

父と友達だつた人は、もう何人もゐないし、老齢になつて外出は困難なので、唯一の元氣な女友達が応援に駆けつけてくれるのは、百年祭の何よりの花である。

ドンさんは、ぼくが神妙な受験生であると思ひこんでゐた。しかし、ぼくが一中で何度か謹慎処分を受け、三年生の時、卒業生を殴つたのが因で、退校同様に京都の中学に転校させられた事情はご存じであつた。当時、村長をしてゐた郷里の親父もドンさんに手紙を出して、「旧制高校から、ドンさんのやうに法学部に進学させたい。さもなければ郷里で百姓をさせるつもりだ」と云ひ送つてゐた様子だつた。

しかし、ぼくはひそかに、萩原朔太郎が講師をしてゐる明大文芸科に進むことを一人できめてゐた。が、そのことをぼくは、誰にも云ひ出せないでゐた。それに、自分の中でも何かもやもやとしたものがあつて、決心のつきかねるものがあつた。一徹な親父は、ぼくが文芸科などへゆくと云へば、

い足取で駆け出され、向ふからやつてきた電車に飛び乗ると、歩道に立つて見送つてゐるぼくに、二度も三度も手をお振りになつた。ぼくはそれに応へて先生に頭を下げながら、何故だかひどくかなしかつたことを覚えてゐる。それは、ものごとを決意するときの、あのかなしみに似てゐた。保田先生に会ふことをすすめて下さつたのも先生であつた。ぼくら朔太郎先生を敬慕する二、三の学友は、先生の詩集『水島』の中の詩を、声に出してしきりに愛唱した。

漂泊者の歌

日は断崖の上に登り
憂ひは陸橋の下を低く歩めり。
無限に遠き空の彼方
続ける鉄路の柵の背後に
一つの寂しき影は漂ふ。

ああ汝 漂泊者！

過去より来りて未来を過ぎ
久遠の郷愁を追ひ行くもの。
いかなれば踰爾として
時計の如くに憂ひ歩むぞ。
石もて蛇を殺すごとく

一つの輪廻を断絶して
意志なき寂寥を踏み切れかし。

ああ 悪魔よりも孤独にして
汝は氷霜の冬に耐へたるかな！
かつて何物をも信することなく
汝の信ずるところに憤怒を知れり。
かつて欲情の否定を知らず
汝の欲情するものを弾劾せり。
いかなればまた愁ひ疲れて
やさしく抱かれ接吻する者の家に帰らん。
かつて何物をも汝は愛せず
何物もまたかつて汝を愛せざるべし。

ああ汝 寂寥の人

悲しき落日の坂を登りて
意志なき断崖を漂泊ひ行けど
いづこに家郷はあらざるべし。
汝の家郷は有らざるべし！

それから、それらの友人と語らつて、その頃刊行された先生の著書『帰郷者』の名を頂いて同名の同人誌を出したりした。昭和十六年の秋頃から、先生は自宅で病

臥されることが多くなり、翌十七年五月十

一日、詩人三好達治氏が、「この聖代に実に地上に存在した無二の詩人」とのちに詠った朔太郎先生は長逝された。越えて十三日の告別式にはぼくは友人と一緒に参列したが、肩を落した犀星や、和服下駄穿きの昂然とした光太郎の風姿などが今も眼底に残っている。そしてその年九月、数え年二十で郷里岡山の部隊に入隊するために、ぼくは「コギト」の肥下さんに見送られて東都を後にした。ぼくの文学少年時代は、かうして終った。

入隊中のぼくは、昭和十九年五月、かねて約束のあつた妻と、サイパン島に転出する転属休暇を利用して挙式した。しばらくしてサイパン島守備部隊は玉砕し、ぼくらは原隊に復帰した。妻は、その後も東京の小学校に奉職してゐたが、ぼくの身代りのやうに保田、棟方両先生を訪問して、両先生の御様子を軍隊のぼくに知らせてくれた。そんなある日、保田先生から、「柳井さんは、萩原先生の色紙は一枚も持つてゐないと思ふので、これを、柳井さんにあげますわ」と、朔太郎先生の色紙を頂戴した由を書いてきた。

淙々と流れつづけてゐた。

わが草木とならん日に
たれかは知らむ敗亡の
歴史を墓に刻むべき。
われは飢ゑたりとこしへに
過失を人も許せかし。
過失を父も許せかし。

父の墓に詣でて

赤く燃える火を見たり
獣類の如く
汝は沈黙して言はざるかな。

詩集『氷島』の中の「火」と題する詩篇の一節である。その後、戦火は本土にも及び、次第に苛烈を極めてゐた。郷里の父の厳命で、妻は学校を辞めて東京を発つことになり、その際後送を頼んで下宿に残した荷物と一緒に、その色紙も空襲で灰燼に帰した。

あしかけ四年軍隊にゐたぼくは、敗戦の年の秋、郷里に復員し、爾来十年、家郷で農耕に従事する。その間、ひそかに書き綴つた詩をまとめて、昭和二十九年、第一詩集を刊行した。(限定百部)その詩集は、棟方志功先生が拙詩を板画にして下さつて、その手刷板画十数枚を巻頭に飾つた豪華本であつた。その後記の一節に、ぼくはつぎのやうに記してゐる。

「……先師、萩原朔太郎に会ひしは昭和十五年の春なりき。その日、ヨーロッパの絶望とアジアの苦悶と、その時代の要に立つて、われわれの詩人がほとんど無益に

燃える姿をわれは見しなり。詩人は芭蕉を、その人生実感の仰ぐばかりの深さを語り給ひぬ。

越えて十七年の初夏、師は逝き給ひ、その年秋、われ学半ばにして召され、征旅につきぬ。われその頃より詩作を試み、爾来十年、省みて精進の念乏しきを深く愧づ。やがて、京都に出て、保田先生の縁で教育図書出版の仕事に従事して今日に至つてゐる。その間、詩壇とは一切交渉なく、ひとり詩を作つてきた。

戦後復員して、朔太郎先生のお墓参りをしなければと思ひながら、四十年が過ぎた昨年五月、やつと墓参がなつた。前橋市の政淳寺の墓地は、郊外に引越してゐて、ぼくは葉子さんをはじめ朔太郎忌に参加した人々と、整然としたその墓地に清閑と建つ、光英院釈文昭居士の墓前に頷いた。

よく晴れた五月のその日、アカシヤの花は咲き、遠く榛名富士の絶頂が光つてゐた。ぼくは、先生のかなし詩のきびしさと久遠の郷愁をひとり思ひながら、皆と別れ、利根川のほとりに宿をとつた。

若い日の先生が身を投げんとひとりさまよはれた利根川の速い流れは、その日も

ぼくはその夜、先生の右の詩をそつと口吟しながら、朔太郎先生がいくつかの詩に歌ひこめられた詩の心を、より明らかにしなければならぬと思つた。

この生の底のない深みが現在の瞬間に照射するとき先生の詩の一つ一つを、その孤独や郷愁や思惟や、そして何よりもその詩精神を、近代の歴史の上に浮び上らせるやうな朔太郎詩の解明を書かねばと、そんなことをひそかに思つてゐたのだつた。

堀沢 祖門 著

インド仏教の再生

——少年留学僧サンガラトナの歩み——

発行所 郁 朋 社

〒101 東京都千代田区三崎町三三三三

太陽ビル

振替 東京六一〇〇三二八

定価 一六〇〇円

後記

▼お詫びと訂正。「春秋」第四集の浅野晃生の詩「縁を讀へる歌」の第六節の詩句に左記の誤りがあるので、訂正、お詫びを申し上げます。

いつまでもともに歩まん
日を盡くしまことに盡くして
の第二行目の「に」は誤りで、
日を盡くしまこと盡くして
が正しく、謹んで訂正します。

▼菅原杜子雄氏の急逝。「春秋」主幹の菅原杜子雄が、九州の「春秋」会員と共に訪中、帰国直後の六月六日、急逝した。痛惜に堪へない。享年、六十五歳であった。
弔辞の掲載を快く了承下さった柳川の立花和雄氏、深切な追悼文をお寄せ頂いた中国馬鞍山市の于強氏、翻訳の銭学明氏にあらためてお礼を申し上げます。

▼「春秋」の假名遣について。「発表作品は、すべて歴史的假名遣とする。」といふ、「春秋」誌の唯一の主張について、故菅原

▼明治後期から昭和の敗戦まで、数次にわたって国語国字の改変を企て、その都度世論の猛反撃を受けてきた国語改良論が、戦後の昭和二十一年、突如断行実施されたのはなぜだらうか。

第一は、敗戦の混乱の中の国民の無気力と自己喪失が、国語の改変といふ大問題を一部の改変論者の暴挙にゆだねたこと。

第二は、占領軍の要請でやってきたアメリカの教育使節団が、わづか一ヶ月足らずの調査で、国語改良・ローマ字採用を「勧告」したこと。自国より十倍も長い歴史伝統を持つ日本の文字を変へると勧告するのは戦勝者の思ひ上りで、この御墨付にこそどりしたのが、この使節団に協力した改変論者らであった。

第三は、これらの改変論者が、戦後の国語審議会の指導権を握つてゐたこと。
以上が一年以上の長い伝統を持つ国語の表記法が、一朝にして破壊された事情である。

▼「現代かなづかい」の欺瞞や、「現代かなづかい」の原則上の矛盾、「現代かなづかい」の実際上の矛盾等については詳述はさける

杜子雄とも論争したが、なぜこのことに固執するのか、この主張の背景を、この機会に述べて、会員諸氏の了承を得たいと思ふ。
上代、假名が音節文字として定着してくるにしたがつて、語表記は一定してきた。その後、「い・ゑ・ひ」等にあつた音韻の区別が失はれて同音に帰した時、これらの假名の間に混乱がはじまつたが、その混乱期にも、和歌やその他の文学作品では、前代からの假名づかひを踏襲することが多かった。このことは、假名がすでに音だけでなく語の表記として固定してゐたことを語るものである。

假名の性格変化・表音文字の表意性などを論じ出せばきりがなが、平たくいへば、假名と呼ばれる文字も、文字であるからには、いつまでも假名であることにとどまらないで、文字本来の役目をはたす歴とした文字になる。

すなはち、その結合や、文中に占める位置によつて、語を表はし、語と語との関係を示す。

かうして、ある語はある假名で書き、ある意味はある假名で表すといふ慣例が、一旦成立すると、その慣用化した書き方が意

が、臨時国語調査会の会長であつた森鷗外が、大正十一年七月九日、「自分は日本文化の将来について些かの懸念もない。ただ假名遣を変へようとする運動があることだけが気がかりでならない」といふ、悲痛な言葉を遺して世を去つた後、大正十二年十二月二十四日に開かれた臨時国語調査会の総会で可決された假名遣改定案に対して、山田孝雄博士が、同十四年二月の「明星」誌上に、「文部省の假名遣改定案を論ずる」を発表し、「明治三十三年以来、文部省の計画したる幾多の改革は一たびも文章に裨益したるを聞かず。却つて語格假名遣の誤謬を天下に蔓延せしめたるのみ」と断じ、与謝野晶子は、「古今の文献に書かれた言語は、全く国民精神の結晶であつて、その言語に記載した文字は、単に口頭の発音を耳に送ると云ふ機械的な役目のもので無く、それによつて我々の祖先が忠孝し、交友し、思索し、学問し、文学し、道徳し、恋愛し、政治し、商業してきたのである。我々もまた此の言語と文字とによつて同様の生活を未来へ互つて展開して行くので御座います」と訴へたことを想起するまでである。

味を伝へ、見分ける上で最も能率の高い形となる。

さういふ假名の伝統性、有効性を保持するのが歴史的假名づかひの立場である。

▼幕末から明治御一新にかけて、日本が始めて西洋諸国に接したとき、漢字は文化・知識の障碍だ、それを排除しないことには、西洋諸国に太刀打できないといふ漢字蔑視が一部に起り、それが明治初期を通じて欧化主義者の固定観念にまで発達した。それ以後、昭和の敗戦後の国語改革までの国語国字改良運動は、煎じつめれば、明治開化期の西洋崇拜が産んだ偏見で、学理的な根拠にもとづくものではなかつた。

明治以後、国語改良論はさかに行はれ、それが文部官僚と結託して、国語政策になつたりしたが、敗戦までの国民の大部分は健全な常識を失はず、一部の急進主義者の国語改良案を実施することを許さなかつた。

▼しかし、敗戦後の国民の虚脱状態につけこんだ、国語改良論者は、文部省の国語審議会を乗取つて、十分な審議をつくさず、少数の反対意見を押し切つて、明治以来何度も未遂に終つた年来の野望を一挙になし遂げた。

▼新しい執筆者の紹介。

・由水十久 加賀友禪の第一人者。氏は歌もよくされる。「春秋」第一集から、賛助会員として御支援を頂いてきたが、同人松浦哲さんの紹介で同人になつて頂いた。

これまで、「源氏物語」「萬葉集」「能」「歌舞伎」などを主題にした個展を重ねてこられたが、染絵「うなる」は、遠く海外でも反響をよんだ。

文化庁の文化財鑑査官の北村哲郎氏は、『うなる』発表当時、「短歌に残された由水さんの半生は、苦難に満ちて壮絶でさへあつた。幼い日の思ひ出や夢を描いた童児の図は、ままならぬたつきの仕事の合間におけるひと時の心の慰め、心を自由な世界に遊ばせる手だてではなからうか。跳ねて、踊る姿にはうれししい心の高ぶりが、静止の姿にはしみじみした心の安らぎが感じられる」と語り、女優の新珠三千代さんは、「自然の中に人物を巧みに配した模様をお得意とされる加賀友禪作家由水十久さんが、童をテーマに描かれた染絵『うなる』を拝見いたしますと、きせかへ人形や雪遊びをした幼き日の思ひ出、なつかしい日本の風物、古代への思慕、あるいは、若き日より追ひ

もともとやまぬロマンと夢が、心の中をか
けめぐります」と語つてゐる。金沢市在住。
・井伊文字 歌人。彦根市長・井伊氏夫人。
琉球王家十五代尚昌氏長女。

文字夫人にお会いしたのは、昭和五十二
年十月のことであつた。杉田有窓子翁のお
伴をして、彦根藩主のお浜御殿とよばれた
千松館のお宅に訪ねたのだつた。

鉄の丸い鋏を打つた大扉の大門は取り毀
されて、通りから玄関が丸見えだつた。

「日常は変哲もない主婦として、手に赤
切れをきらせ、働きに働く私であつたが、
枯れ草の上に地響をたてて倒れた一番太い
門柱の音は、心の底を打つた」と、随筆に
書かれてゐる、そのままの夫人であつた。

敗戦後、御主人の直愛氏が襲爵され、三
日目に新憲法が發布されて平民になられた
ので、三日間の伯爵夫人でした、と淡々と
語つて微笑された。

何度か重病の床に臥された夫人は、「すつ

かり病^まぬけがしてしまひました」と、その
慈顔にはかげりもなかつた。

「三十畳敷の部屋にぼつんと寝てゐたの
ですが、夕方になると蝙蝠がとびかひ、庭
には狐もゐましたのよ」とも、おつしやつ
てゐた。

さきごろ、今までの歌集八冊をまとめて、
「井伊文字短歌作品集」を刊行されたので、
その中から沖繩関係の歌を勝手に編ませて
頂いた。彦根市在住。

・村井裕子 村井さんのことは、誌上に簡
単な紹介をしてゐる。京都市在住。

・柳井愛子 画家、東光会委員。娘の頃か
ら、阿波の天狗久翁の許に通つて、人形浄
瑠璃の文楽人形を描きはじめ、爾来、三十
数年文楽人形を描きつづけてゐる。「春秋」
のただ一人の会計係である。大津市在住。

▼新しい編集同人の紹介。

・藪 憲正 新学社の編集部で、学習雑誌

の編集長をしてゐる。一九四〇年生れであ
る。

「春秋」第一集から、割付、校正など、
わがことのやうに手伝つてくれた。しかも
「春秋」の仕事は勤務時間外で無報酬とい
ふのが最初からの条件であつたから、日曜、
休日をこの仕事に当てて助けてくれた。京
都市在住。

▼続「中谷先生を囲む座談会」について。

第四集の座談会の付記で、この続きは、
第五集に載せるつもりと記したが、中谷先
生から、われわれその場に居たものだけが
面白くても、それが必ずしも、会員の皆さ
んにとつて面白いとはかぎらない。編集の
都合で、割愛してもいいのではないかとい
ふお話で、割愛することにした。

▼「第五集」遅刊のお詫び。編集子の勤務
の都合で、約一ヶ月以上遅刊したことを、
深くお詫び致します。(柳井)

「春秋」の会 規約

・「春秋」の発行

佐藤春夫先生の命名になる同人冊子「春
秋」は、年間春秋二回の発行とし、同人・
賛助会員・会員にのみ配付する。なほ掲
載作品はすべて歴史的仮名遣ひとする。

・同人

同人は編集同人の推薦により、「春秋」誌
上に作品を発表することができる。同人
費は年間二万円以上とする。

・賛助会員

賛助会員は同人冊子「春秋」の発行に賛
同し、年会費一万円以上納入するものと
する。

・会員

会員は同人冊子「春秋」の読者とし、年
会費五千円を納入するものとする。

春秋・第五集

昭和六十一年十一月十五日発行

編集——柳井 道弘

編集同人——浅野 晃・伊藤 桂一・神門 四郎

駒田 信二・中谷 孝雄・林 富士馬

柳井 道弘・藪 憲正

発行所——春秋詩社

滋賀県大津市本宮二―二一―一四(柳井方)

電話 ○七七五―二四―五〇五三

振替口座 京都〇―三四三六五

印刷所——株式会社 昭英社